

豊公謡曲

高野詣

シテ 豊太閤の母の靈

子方 豊太閤

ワキ 豊臣家臣

ワキツレ 徒者

時 春 所 紀伊高野山

「花を手向の山の名の。 く。 高野の奥を尋ねん。

詞

「抑是は太閤の御所に仕へ奉る者なり。さても此御所三韓御退治のため。九州に御在国の砌。北堂御不例以の外なるよし聞し召され。今一たびの御対面と思し召し。時日を移さず御急ぎなされ候へども。無常の習ひにて空しくなり給ひぬ。力及ばせ給はず御歌の候ひしは。亡き人の形見の髪を手にふれて。包むに余る涙悲しもと遊ばされ。御葬礼を御つとめ有つて。重ねて御下国なされ。三韓御退治にて。文禄二年八月の末還御候。春立ち返り既に三回に当り候へば。高野山に御登りなされ。いよ／＼御菩提をも弔らはせ給ふべきにて候ふ間。御供仕り候。

「小車に法の門出の遙々と。 く。 かへり都に立つ雲の。迷はぬ道は世の中の。よし足曳の大和路や。末を急ぎて紀の国。高野の山に着きにけ

り。く。

詞
「御急ぎ候ふ程に。高野の山に御着きにて候。北堂
春岩大禪定尼の御位牌所に御安座ありて。御焼香
なさるべく候。御車を寄せ候へ。

シテサシ
「人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふ
なる。無明塵労即是菩提。大道本来所染なし。
白雲何ぞ心あらん。

歌
「暁を高野の山に待つ程や。く。苔の下にも有明

の。月の光は春の夜の。花の木陰に若く物は。亡
き身の果といひながら。名は残る世の習ひかな。

く。

ワキカール

「春の夜の夢の浮橋とだえして。峰に残れる暁の。
ほのかに見ゆる面影は。それがあらぬか思ほえず。
反魂香にあらねども。花の匂ひに誘はれて。谷よ
り出づる鶯の。声こそ道のしるべなれ。

シテ詞

ワキカール
「あら不思議や。月の夜陰に老尼の姿の見えけるぞ

や。こゝはもとより女人結界の山なるに。不淨の身にてまゝ登る。故を如何にと答ふべし。

シテ詞
「現にもあらぬ身なれば津の国の。

ワキ
「難波の浦のよしあしの。二つの道も。

シテ
「筋に。

地
「頼む仏の御心に。く。かゝる高野の山雲の。浮世の中の罪科を。ゆるし給ふぞ有難き。く。
ワキ詞
「簾中近う參り此處の謂れ委しく語り候へ。

クセ地
「抑金剛峯寺と申すは。帝都を去つて二百里。郷里を離れて無人声。八葉の峰八の谷。諸行無常の花をだも。晴嵐枝をならさず。

シテサシ
「生滅々已の月をさへ。白雲影を隠さず。おのづから静なりける嶺の松。弘法大師其昔。入唐ありし折からに。薩埵にうけて仏法も。東漸なりと日の本に。三鉢を投げて此行方。とまらん山を我があらん。伽藍と定め申さんと。遙の空に投げ給ふ。

「三鉢は落ちて此嶺の。梢にかかる其故に。三鉢の松とは申すとかや。されば星霜ふりにたる。大塔ことに金堂。軒端かたぶき崩るゝを。悲しみ給ひ豊臣の。御代の始めにたらちねの。逆修のためにいらかをも。上人之を造営す。

シテ
「猶陰深き奥の院。

地
「古木怪巖苔むして。連なる道の右左。石塔数もいさ知らず。かゝげ添へたるともし火の。かげに晨

鐘夕梵の。心耳をすます靈地なり。

ロンギ地

「げにや老尼の物語。聞くにつけてもなつかしき。住家を知らせ給へや。

シテ
「かゝる貴き此山の。淨土に登り住む事は。賢き人の孝行の。道に引かるゝ心かな。

地
「そもや浮世に亡き跡は。色即は空なるものを。何の残りて呼子鳥の。声をかはすも山中に。覚束なくぞ覺ゆる。

シテ
「天が下。治むる雲の上人の。かる山路によぢの
ぼる。心の程の嬉しさを。深山隠れの老木の桜。
花に顯れ出づるぞや。

地
「今の宣ふ言の葉は。生ふし立てたる我行方。千代
もと祈るたらちねの。春岩にてましますか。

シテ
「其原やく。伏屋に生ふる筍木の。ありとは見え
てあはれ世の。昔に歸る心地して。

地
「袖の涙は石の上。ふるや雨夜の春の月。霞にまぎ

れ失せにけり。く。

ワキ詞
「如何に誰かある。

ツレ
「御前に候。

ワキ
「大相國今夜不思議の御靈夢を御覽ぜられて候ふ
間。此寺の衆徒を召し出し。春岩の御菩提を。い
よく弔はせ申さうするにて候。

ツレ
「畏つて候。

歌
「暁の尾上の鐘の一声に。く。僧は仰に隨ひて。

清巖山に参りつゝ。座具を述べ香を焼き。南無尊
靈春岩大禪尼。一見阿字五逆消滅。真言得果即身
成仏。

「あら有難の御弔ひや。此御経の功力により。いよ
く五障の苦を離れて。只今夢に顕はれけるぞや。

「それながら見しに変れる御容。七宝莊嚴の玉のか
んざし。忍辱慈悲の御衣。色も妙なる御声の内に。
仏言を唱へ出で給ふ。是や誠に即身成仏。疑ひも

なき有様なり。

「是れ孝行の道により。微妙の法を得る事の。浅か
らざりける志。いかで報謝をつくすべき。

「見ればげに。歌舞の菩薩となり給ふ。遊戯神通の
事なれば。そのかみ世尊の御前にて。阿難座して
歌へば。

「迦葉立ちて舞ふ。

「其音樂の一ふしを。只今かなで見せ給へ。

地「さては昔在靈山の。妙なる法をひるがへす。袂ゆ
たかに立ち舞へる。舞樂の遊びは面白や。」
(舞)

「思へば過去の宿縁なれや。く。ふさんかせんき
う因縁の。善根こゝに白雪の。花を散らせる高野
山。瑞雲たなびき。靈香四方に薰じつゝ。笙笛琴
箜篌琵琶鏡銅鉉。思ひくの声はして。廿五の菩
薩只今こゝに影向なりて。五色の旗は霞に棚引き。
玉の御輿は日にかゝやきて。來り迎ふる此寺や。
靈山会場も目前たり。此樂しみを譲り置く。君
が齡は万歳の。守護を加ふる志。只孝行の道によ
る。く。行末こそは久しけれ。